A translation of Susan Glaspell's "A Jury of Her Peers "(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山名, 章二 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3888

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

翻訳　スザン・グラスペル作「女仲間の評決」（その１）*

A translation of Susan Glaspell's "A Jury of Her Peers" ** (1)

山　名　章　二

防風扉をあけると身を切るような北風にあおられ，マーサ・ヘイルは大きなウールのスカーフをとろうと大急ぎでとってかえした。慌ただしくスカーフで頭をつつみこむ間，目だけで台所をひとわたり見渡して，あわてた。たしかに自分まで呼び出されたのは並大抵のことではないーおそらく，ディクソン郡で起こったことがないほど珍しいことなのだ。しかし，目に入ってきたのは，自分の台所がそのままで放ってはおけない状態だ，ということだった。つまり，パンの材料が混ぜあわせるばかり，篩にかけたのが半分，かけてないのが半分，という有様だったのだ。

なんによらず中途半端なのがいやな性分なのだ。しかし，町の連中が夫を迎えに立ち寄ったときにも，仕事にとりかかってはいたのだが，保安官がかけこんできて，妻がおくさんにも来てほしいと言っていると言い，どうも妻は怖気をふるってしまい，だれか女の人にもう一人同行してほしいようだと，にやりと笑いながら，付け加えたのだ。そんなわけでなにもかもそのままにすることになったのだった。

おまけに夫のいらいらした声がした，「マーサ！　外の寒い中に待たせておいてはいかんぞ」

彼女はもう一度防風扉をあけ，今度は大きな二人乗りバギーで待っていた男三人と女一人の一行に加わった。

身づくろいをすませると，後部座席に乗り込み隣に座っている女性にもう一度目をやった。去年郡の品評会で会ったことがあったが，憶えていることと言えば，保安官のつれあいらしくないということだけだった。小柄で，やせていて，声に力強さがなかった。

ピーターズ保安官の前任者ゴーマンのつれあいは，口を開けば法律のあと

おしをしていますよと言っているような声をしていた。しかし，新任保安官のつれあいがそれらしくないとしても，もっともらしい夫の様子が埋め合わせていた。まったく自分の方から保安官に選ばれる類の，声の大きなどっしりした男で，法律を守る人間には特に愛想よく，罪を犯す人間と犯さない人間の違いなどわかっていると言わんばかりだった。そして，今回，自分たちには誰かれなくこれほど愛想よくにぎやかにしているこの男こそ保安官としてライトの家に向かっているのだということが，マーサの心につき刺ささるように浮かんだのだった。

「この時期，このあたりもあまり住みやすくはないわね」とピーターズ夫人は，女も何か話していないとでも感じたかのように，口を開いた。しかし，ヘイル夫人は返事もしおえなかったほどだ。と言うのも，馬車が小さな丘を登りきり，ライトの家屋敷が見えてきたからだ。それに，家を見ると話す気もしなくなった。この寒い3月の朝，家がとても寂しげだったからだ。今に始まったことではなかった。窪地にあるし，囲むように生えている何本かのポプラも見栄えが寂しげだ。男たちは家に目をやりながら事件の話をしていた。郡検事は片側に身を倒し，馬車が近づいていく間家屋敷にじっと目を据えたままでいた。

「来てくれて嬉しいわ」 二人して男たちのあとから台所の戸口を入ろうとしたときに，ピーターズ夫人はそわそわした口調で言った。

ドアノブに手をかけて戸口に立つ段になっても，マーサ・ヘイルは，一瞬，自分には敷居をまたげないかもしれないと感じた。こうして来てみれば，またげないかもと思えた理由は前にまたいだことがないというだけのことだった。何度もくりかえし考えてはいた「出かけていって，ミニー・フォスターに会ってやらなくちゃあ」と。ライトのつれあいになって20年にもなるというのに,彼女はミニーと言えばミニー・フォスターだと考えるのだった。それにしても，いつも何かの用事ができてしまい，ミニー・フォスターは忘れられたままになっていた。しかし，今度はたしかに来てやれた。

男たちはストーブに歩み寄った。女たちは，戸口のそばに身を寄せ合って立っていた。郡検事のヘンダスン青年は，向きなおると言った「火にあたってください，ご婦人方」

ピーターズ夫人は一歩前へ出たが，立ちどまって，言った「あの・・・寒くはないです」

そんなわけで女性二人は戸口のそばに立っているだけで，はじめは台所を見わたすこともしなかった。

男たちはしばらくの間，保安官が朝の早いうちに助手をよこして火を起こさせておいてくれてとても良かったことを話題にした。ついで保安官のピーターズはストーブから後ずさりすると，コートのボタンを外し，さあ仕事だとでも言うように調理台に両手をついた。「さて，ヘイルさん」彼は半ば職務上の口調で言った「あれこれ物を動かす前に，昨日の朝ここへ来たときに，なにを目撃したのか，ちょっとヘンダスン検事に話してもらいたいんだがね」

郡検事は台所を見まわしていた。

「なにか動かされたものはあるのかな，ところで？」と言うと，彼は保安官に向き直った。「昨日帰った時のままかね？」

ピーターズは食器棚から流しへ，流しから調理台の近くの使い古した小さな揺り椅子に目をやった。

「そのまんまですな」

「だれかを残しておいた方が良かったのだが」と郡検事が言った。

「ああ，昨日と言えば」ときのうのことなぞ考えるのもいやだというような身振りをしながら，保安官が言い返した。「気のふれた男を引き取りにフランクをモリス・センターに行かせたんですがね。昨日は忙しかったんですよ。今日までにはオマハから戻って来とられるのはわかってたしね，ジョージ，それに，ここは万事自分で目を配ったんで……」

「ま，ヘイルさん」と済んだことはいいと言わんばかりの口調で，郡検事は言った「昨日の朝ここに来たときの様子を話してくれたまえ」

ヘイル夫人はドアに寄りかかったままで，参観日の授業を見学中に，発表の順番が自分の子供に回って来た母親が滅入った気持になるあの感覚をおぼえた。夫のルイスは話がそれからそれへと止めどがなくなり，よく混乱してしまうからだ。今度ばかりはすっきりと話してほしい，よけいなことを言ってこれ以上ミニー・フォスターのめんどうになったりしないようにと願っていた。夫がおいそれとは口を開かず，様子がおかしいのに彼女は気づいた，まるでこの台所で立ったまま昨日の朝の目撃証言をするよう迫られて反吐でもはきそうな様子なのだった。

「で，どうかね，ヘイルさん」と郡検事が促した。

「ジャガイモを積んでハリーと町へ出るとこだったんでさ」とヘイル夫人の夫が口を開いた。

ハリーは彼女の長男だが，今はいない。きのうはジャガイモを出荷できなかったので，朝になってハリーが出かけたのだ。保安官が夫にライトのところまで同道するように，郡検事に昨日の朝の様子を話し，現場ですりあわせをしてほしいのだと言いに立ち寄った時には，もう留守だったからだ。他にもいろいろ考えていると，ひょっとしてハリーの身支度が足りなかったのではないかと心配になってきた―男たちは誰一人北風の厳しさに気がついていないから。

「この街道をやって来たんでさ」とヘイルは話を続けていた，一行が通ってきたばかりの道路を手で指しながら「それで，ここが見えてきた頃に，ハリーに言ったんだ「電話を引くつもりにさせられるかどうかジョン・ライトに確かめてみるか」ってね。だってね」とヘンダスンに説明した，「誰かに一枚のってもらわなくっちゃあ，よっぽど払えば別だが，こんな枝街道まで引いてくれゃしねえからね。前にも話はしてあったんだが，剣もほろろだった，だいたいみんなおしゃべりが過ぎる，よけいな邪魔あされずに静かなのがいちばんだと来た，そう言うあいつがどれほどのおしゃべりかは知ってると思うがね。それでも，家にまで出かけていって，かみさんがいる前で話せば，それに，女衆はみんな電話が好きだし，こんな寂しい街道の外れにゃあ悪いもんじゃないとでも言えば，ま，そう言ってやるつもりのことをハリーに話したんだ。もっとも，かみさんがなにを欲しがっても，ジョンの奴にゃあどうなんだかわからんとも言ったけどね」

ほら始まった，言わなくてもいいことを言ってるよ！　ヘイル夫人は目くばせをしようとしたが，運よく郡検事が口を挟んでくれた。

「そのことは後まわしにしよう，ヘイルさん。是非話したいことだが，まず，来た時の様子に話を進めたいんでね」　そう言われて切り出したヘイルの口調はとてもゆっくりで慎重だった。

「なんも見えず，なんも聞こえなかったよ。で，ノックした。それでも中はまるで静かだった。起きてるはずだとはわかってた―8時をまわっていたし。だからまたノックしたんだ，もっと強くな，すると誰だか「どうぞ」と言う声がした気がしたんだ。わからなかったね，気がしただけ―今でもわからねえ。かまわず戸を開けたんだ―この戸だがね」と立っている二人の女の傍ら

の戸にむけていきおいよく片手をつきだし，続けて「そしたら，そこ，その揺り椅子によ」と指さしながら言った「かみさんが座っていたんだ」

台所の全員が揺り椅子に目をやった。ヘイル夫人には，揺り椅子とミニー・フォスター，つまり20年前のミニーとが似ても似つかない気がした。色は薄汚れた赤で，背もたれの横木も真ん中のはとれてなくなっていて，全体に横に傾いてもいた。

「どんな様子だった？」郡検事が問い詰めている。

「そうよなあ，妙な一顔つきだったな」

「どういうことかね，妙なって？」

そう言いながら郡検事は手帳を取り出した。ヘイル夫人は目に入った鉛筆が気に入らなかった。よけいなことを言って手帳に書きとめられ，めんどうを起こさせまいとするかのように，夫に目を据えていた。

鉛筆に影響されたのか，ヘイルはたしかに用心深く話した。

「次にどうするのかわからないって風だった。それに，ちょっと一くたびれたようだったな」

「あんた方に来られてどう思っていた様子だったかね？」

「べつにこれって一気にしていたと思わねえな。あまり気にもしなかったし。言ったんだよ，元気かね，奥さん？　寒いね？ ってね。そしたら「そうかい？」と言っただけ一で前掛けに折り目を付けようとしつづけてたね。

「まあ，驚いたよ。火にあたれとも座れとも言わずに，自分は座ったまんまだ，こっちに目も向けずでよ。それで，ジョンに会いたいんだけどね，と言ったんだ。

「するとよ一笑ったんだ。あれは笑ったと言うんかなあ。待たしてたハリーと馬のことが気になって，言ったんだ，少しきつく，「ジョンに会えるかね」ってよ。するとよ「いいや」となんだかだるげに言う。こっちが「いないのかね？」と聞く。するとよ，おれの顔を見て「いいや，いるけど」と来た。癇に障ったから「なら，どうして会えないのかね？」と聞いたんだ。するとよ，相変わらず静かでだるげな口調で「死んじまったんだよ」と言うと一前掛けに折り目をつけはじめたんだ。「死んだ？」と聞こえるにゃあ聞こえたが腑に落ちねえときの口調で言ったんだ。

「でも頷くだけ，これっぽっち慌てもしねえで，揺り椅子を揺らしてた。

「「なんてこった，どこ，どこにいるのかね？」と言ったんだよ，なんて言っ

たらいいもんかわかんなくてね。

「返事はなくってよ，二階の方を指すだけさ，こんな風によ」と上の部屋を指差した。

「おれは立ったよ，上へ行ってみる気でね。だけど，この頃にゃあもうどうしていいかわからなくなってたもんだから，そこからこっちへ来ただけで，言ったんだ「一体，なんで死んだのかね？」とね。

「するとよ「首にひもが絡まって死んだのよ」と言いながらエプロンに折り目をつけ続けてたんだよ。」

ヘイルは話すのをやめ,揺り椅子ををじっと見て立っていた。昨日の朝座っていた女の姿がまだ見えるかのように。誰も黙りこくっていた。誰の目にも昨日の朝そこに座っていた姿がまだ見えるようだったからだ。

「それからどうしたのかね？」とようやく郡検事が沈黙を破った。

「出て行ってハリーを呼んだんでさ。ま，助けが必要かも知れねえと思ってね。中にいれてやって，二人で上へ行ったんでさ」 声がほとんどささやき声になってしまった「いましたよ，長々と体をー」

「その件は上に行ってからにしてもらおう」と郡検事が口を挟んだ。「こまかく指で差してもらえるからね。今は他のことを話してもらっておいて」

「そうさね，始めは縄を外そうと思ったね。見たところどうもー」

言いよどんだ，顔が引きつっていた。「けど，そばへ行ったのはハリーで，あいつが言うには,「いいや，確かに死んでるよ，なんにも触らねえ方がいい」ってね。それで下に降りてきたんだ。

「同じように座ったままでよ。「誰かに連絡したかね？」って聞くとよ,「いいや」って，気のねえ返事だったね。「誰の仕業かね，ライトの奥さん」ってハリーが言ったんだ。少し切り口上でよ，それでエプロンに折り目を付けるのが止んでね。「知らないよ」って言ったんだ。「知らねえだって？」とハリーが聞いたよ，「一緒に寝ていたんじゃあねえのかね？」「そうだよ，でも私ゃ壁側だったし」っちゅう返事さ。それで，ハリーが「誰かが首に縄を巻いて絞め殺したってのに，目を覚まさなかったっちゅうんかね？」って言うとよ，おうむ返しに「目を覚まさなかったんだよ」と来たんだ。

「二人ともどうも解せねえって顔つきをしてたんかもしれねえ，しばらくして「あたしゃ寝付きがいいんだよ」と言ったからな。

「ハリーはもっといろいろ聞くつもりだったんだが，俺がよけいなことか

も知れねえって言ったんだ。当人から検屍官か保安官に話すのがよさそうだってね。それで，ハリーが大急ぎでハイ街道のリヴァーズのところへ行ったのさ，電話があるからな」

「それで，検屍官に連絡しに行ったと知ってあの女はどうしたかね？」 検事は鉛筆を手にして，書こうと身構えた。

「そこの椅子からここのこの椅子に動いたね」とヘイルは角にある小さな椅子を指差して言った「それで，手を組んで下を向いたまま座っていたよ。話を続けなくちゃあって気がしたんでね，ジョンが電話を引くつもりがあるか聞きによったんだがと言うとよ，それを聞いて笑い出したんだが，笑いやむと俺を見たんだ，怖がった顔をして」

鉛筆の走る音を聞くと，話していた男は目を上げた。

「どうだかなあ，怖がったんじゃあねえな」とあわてて言いそえた。「そうは言いたくねえ。すぐにハリーが戻ってきて，ロイド先生が来た。そのあとがあんただったよ,ピーターズさん。まぁこんなところが俺にわかっていて，あんたが知らねえことだろうね」

彼はほっとしてこう締めくくると，少し身動きした，くつろぐかのように。誰もが少し身動きした。郡検事は階段に続くドアの方へ歩いた。

「初めに二階へ行き，それから，納屋とその辺りに出ることにするか」

彼は立ち止まり，台所を見回した。

「ここにはなにも重要なものはなかったのは確かかね？」 彼は保安官に尋ねた。「何か動機の証拠につながるようなものは？」

保安官もあたりを見回した，再確認するかのように。

「台所道具しかないですな」と彼は台所道具のとるに足らないことで少し声を立てて笑いながら，言った。

郡弁護士は，食器戸棚を見ていた。それは，一風変わった見栄えのしない代物で，半分収納，半分食器棚，上の部分は壁に作りつけで下はただの古風な台所用食器戸棚であった。まるで風変わりなところにひきつけられたように，彼は椅子を使って上の部分を開き，のぞきこんだ。一瞬の後，彼は手をべとべとにして引っこめた。

「これはひどいな」と彼は憤慨して言った。

二人の女性は身を寄せ合っていたが，今度は保安官の妻が口を開いた。

「あぁーあの人の果物の瓶詰めよね」と彼女はヘイル夫人を見やり，女同士

ならではの共感を確認した。

郡検事に向き直ると，説明した。「昨晩ひどく冷え込んだときに，そのことを心配してたわ。火が消えるとビンが破裂するかもしれないって」

ピーターズ夫人の夫は声をたてて笑ってしまった。

「まったく，女衆にはかなわんな。殺しで放り込まれといて，手作りジャムが心配だとくるんだからなあ」

若い検事はキッとした口元になった。

「そのうちにジャムよりも心配なことができることになるだろう」

「まあ，とにかくの話」と悪げのない優越感をこめてヘイル夫人の夫は言った「女衆はどうでもいいことで気を使うのには慣れっこだからなあ」

二人の女性はさらに少し身を寄せ合った。どちらも口を開かなかった。郡検事は不意に彼のエチケットを思い出し，将来を想像しているようだった。

「しかしですな」若い政治家らしい慇懃な口調で言った「あれこれ心配ばかりするにしても，ご婦人方がいなかったらどうすることができますかな」

女たちは口をきかず，懐柔もされなかった。検事は流しへ歩み寄ると，手を洗い始めた。向き直って手を拭こうとし，あまり汚れていない部分がないかとローラータオルを回した。

「汚いタオルばかりだ！　家事があまり得意じゃない，ということですかな，ご婦人方？」

彼はシンクの下の汚れた鍋類を蹴りつけた。

「農家にゃあすることが山ほどあるんですよ」とヘイル夫人が不機嫌そうに言った。

「そうですとも。それにしても」と彼女に少し頭を下げて「ディクソン郡にはこんなローラータオルは置いてない農場があちこちにあることを知っていますがね」と言いながら彼はめいっぱいの長さを引きだそうと，もう一度ローラータオルを引いた。

「そういうタオルはね，すぐにひどく汚れるんですよ。男衆がいつもきれいな手をしてくれてるってわけでもないしね」

「ああ，同じ女の仲間意識というわけですな。なるほどね」と彼は声を立てて笑った。彼は真顔に戻ると，彼女に鋭い視線を向けた。「でもあなたとライト夫人は隣同士だった。友人だったんでしょうな」

マーサ・ヘイルは首を横に振った。

「ここ何年かあんまり会ってなかったねえ。この家にも入ったことがなかったよー１年の上になるねえ」

「なぜですかな？　彼女が好きではなかったとでも？」

「私は彼女がまあ好きだったよ」と意気込んで答えた。「農家の女房は忙しいんですよ，ヘンダスンさん。それにねー」 彼女は台所を見回した。

「それで？」と彼は促した。

「楽しい様子だったことがない家だったからねえ」と言ったが，自分に言い聞かせるようだった。

「そのとうりですな」と彼は調子を合わせた。「誰も楽しい家だとは言わないでしょうな。彼女に家事の才能があるとは言えませんよ」

「えぇ，男の方にあったとも思わないけどね」と彼女はつぶやいた。

「二人の仲があまりうまくいってなかったということかな？」彼は間を置かずに聞いた

「いいや，そんなつもりはないね」と彼女はきっぱりと答えた。彼女は彼から少し視線をそらせながら，付け足した。「しかし，どんな家にしたって，ジョン・ライトが住んでるからって，ちょっとでも明るくなるだろうなんて思えないけどねえ」

「そのことは後で聞かせてもらいますよ，ヘイルさん」と郡検事が言った。「今は二階の様子を知っておきたいんでね」

彼は階段ドアの方へ進み，男二人が後からついて行った。

「うちのかみさんがするんなら少しぐらい構わないと思うんだがね」と保安官が尋ねた。「衣類をいくらか持って行ってやるはずだったんだけどね。ま，昨日はあわくってここを出たもんで」

郡検事は自分たちが出た後で台所用具の中で二人だけになる女達を見やった。

「そうですな，お宅の奥さんならね」と言ったとき，彼の視線は当のピーターズ夫人ではなく，後ろに立っている大柄な農家のかみさんに向けられていた。「言うまでないが，私たちの一人ですからな」と彼は責任を負わせる口調で言った。「それにね，奥さん，なんでもいい，役に立ちそうなことに目を配っていてもらいたい。判らんものです，お二人が犯行の動機につながる手がかりに出くわすかも知れんのです。動機が判りさえすればいいんですからな」

ヘイル氏は，サーカスの進行係が気の利いたアナウンスをしますよと思わせる時の仕草をまねて，顔をこすった。

「それはそうだが，出っくわすにしても，女衆に手がかりだってわかるものかね？」と言ったのだ。そして，勿体ぶってそう言うと，彼は階段に通じる戸口を通り抜け，他の人々の後について二階へと姿を消した。

女達は身じろぎもせず黙りこくり，足音に耳を澄ませていた，初めは階段を一段一段のぼり，次いで頭上の部屋を歩きまわる男たちの足音に。

そして，まるで自分を何か奇妙なものから解放でもするかのように，ヘイル夫人は流しの下の汚れたままの鍋類を整理し始めた，郡検事が侮蔑をこめて蹴りつけ，崩した鍋類だった。

「あたしだったら，自分の台所に男衆に入られるなんてやだねえ」と彼女は怒りっぽく言った「こそこそかぎ回るだの，ケチをつけるだのしてさ」

「役目でしているだけよ」保安官の妻は，いつもの通りおずおずと黙認する態度で言った。

「役目，そりゃあ役目はね結構だよ」とヘイル夫人はぶっきらぼうに答えた。「でも，火を起こしに来た保安官代理がこんなことにもちょっと手を出したのかもよ」彼女はローラータオルを引っ張った。「もっと早く気がついてたらねえ！　ミニーはひどくせかされて出て行かなきゃならなかったんだろう？　それなのに，ちゃんと片付けなかったのなんだのって話すなんて性根が腐ってるよ」

彼女は台所を見回した。確かに「ちゃんと片付けられて」はいなかった。彼女の目は，低い棚にある砂糖の容器に釘付けになった。ふたは外されていた。そして，そばには紙袋があり，半分まで詰まっていた。

ヘイル夫人はそこに向かって移動した。

「袋に入れてたんだねえ」と，彼女はゆっくりとひとりごちた。

自分の家の台所で，半分はふるいにかけられ，半分はまだの小麦粉のことを考えたのだ。自分は仕事の邪魔をされて，なにもかも放り出してきてしまった。ミニー・フォスターの邪魔をしたのはなんだろう？　何故仕事は中途で放り出されたのだろう？　ミニーの仕事を始末しようとするかのように彼女は移動した。切りのついてない仕事にはいつもいらいらするのだった。それに，ちらっと視線を走らせて見まわすと，ピーターズ夫人が自分のしていることを注視しているのがわかった。***　はじめたもののなんらかの理由で

おわらないままの仕事がどんな感じなのかをピーターズ夫人に理解してもらいたくなどなかった。

「彼女の果物は残念だったね」と彼女は言い，前に郡検事が開けた食器棚にむかって歩み寄った。椅子に乗ると，つぶやいた「みんなダメになっちまったのかねえ」

たしかにかなりひどい様子で手間取ったが，ついに「大丈夫なのが一瓶ある」と言った。彼女は灯りに瓶をかざした。「これもサクランボだわ」 もう１度探してみた。「まったくもう，この１瓶だけだわ」

ため息をつきながら，彼女は椅子から降りて流しへ行き，瓶を拭いた。

「暑い天気の中で苦労したあげくがこれじゃあ，えらくがっくりするだろうねえ。この夏サクランボを瓶詰めにした午後を思い出すけどさ」

彼女はもう一度ため息をついて食卓に瓶を置き，揺り椅子に座り始めた。しかし，座らなかった。そのいすに座らせないなにかがあるのだった。彼女は背筋を伸ばして立ちあがり，後ずさりして，半分向きを変えると，立ったままみつめた。そこに座りエプロンにひだをつけていた女の姿を見ていた。

保安官の妻の細い声が彼女の想いに割り込んだ。「表の部屋のクロゼットからさっきのものを持ってこなくちゃ」 彼女は別室へ通じるドアを開け，入って行きかけたが，後ずさりをした。「一緒に来てもらえるかしら，ヘイルさん」と彼女はいらいらして尋ねた。「一緒に選んでもらえると思うのよ」

* 紙幅の関係で３回にわけて分載する。

** 英語版は 1) http://www.learner.org/interactives/literature/story/fulltext.html および 2) Susan Glaspell, “A Jury of Her Peers,” (New York: Creative Education, 1993) を使用した。

*** この文に相当する “and then she glanced around and saw that Mrs. Peters was watching her” は上記 2) には収録されていない。